

ときわ台 天祖神社

「天祖神社歌占」の神話と神様

成蹊大学 文学部 日本文学科／文学研究科 日本文学専攻

成蹊大学プリリアントプロジェクト 2020

● 「天祖神社歌占」とは

ときわ台 天祖神社オリジナルの和歌みくじです。弓の短冊を引いて天祖神社・^{あまのいわとびらき}「天岩戸開」絵馬（天祖神社蔵）・御嶽神社・豊敬稲荷神社の神々のご縁を結び、神さまのお告げをいただきます。天祖神社が創建された室町時代、謡曲「^{うたうら}歌占」に見られるような、弓を使った歌占が行われていました。天祖神社歌占では、室町時代から江戸時代にかけておこなわれていた歌占の方法をふまえ、呪文の歌を唱えた後、弓の弦に結びつけられた短冊から一枚を選んで占います。一般的なおみくじに見られる吉凶などの結果や「学問」「健康」「商売」などの項目はありません。和歌のみで占うのは、日本古来の歌占の伝統を引き継いだものです。

この歌占を通して、神様からの励ましのメッセージをお受けとりください。

● ^{あまのいわと}天岩戸神話—^{あまのいわとびらき}天祖神社蔵「^{えま}天岩戸開」^{えま}絵馬の神話

^{あまのいわや}天岩屋に閉じ籠ってしまった^{あまてらすおおみかみ}天照大御神が、天上の神々の尽力によってふたたび姿をあらわし、世界に日の光が戻ったという有名な神話です。『古事記』や『日本書紀』のほか、『古語拾遺』などにも記されています。

太陽の神である^{すきのおのみこと}天照大御神が素戔嗚尊の粗暴な振舞いをおそれて岩屋に閉じこもったため、世界は闇に包まれてしまいました。そこで天上の^{たかまのはら}高天原の神々が集まって相談し、^{おもいかねのかみ}思兼神が^{ながなきどり}天照を岩屋から出す方法を考えました。長鳴鳥を集めて鳴

^{ふとたまのみこと}かせ、^{ぬさ}太玉命は^{あめのこやねのみこと}櫛に^{のり}勾玉や鏡、幣をつけたものを捧げ持ち、^{あめのうずめのみこと}天児屋命は祝詞を唱えるなど、様々な趣向を凝らします。^{あめのたちらからおのみ}天照受売命が神がかりして乳房も下半身も露わにして踊ると、たくさんの神々がどっと笑い、その様子を不思議に思った天照は岩戸をわずかに開けてその理由を尋ねました。天照受売命は「あなた様よりも貴い神がいらっしゃっていますので喜び楽しんでおります」と答え、天児屋命と太玉命が鏡を差し出して天照に見せると、天照はますます不思議に思って身を乗り出します。そのとき岩戸のそばに隠れていた^{あめのたちらからおのみ}天手力雄神が天照の手をとって外に引き出し、太玉命は、天照がふたたび岩屋に戻らないよう岩戸の前に注連縄を張りました。天照が岩屋から出たことでふたたび光が戻り、高天原の統治者として明らかに認められたと考えられています。

天祖神社の古絵馬に描かれた天岩戸神話は、古代の氏族の^{いんべのひろなり}斎部広成が斎部家の歴史や言い伝えを記した『古語拾遺』に基づいています。『古語拾遺』の天岩戸神話は『古事記』や『日本書紀』に比べて次のような違いがあります。天照への捧げものに矛や盾、刀などの武器類が加わっていたり、天照受売命が矛を持って舞ったりするほか、太玉命が中心的な役割を担い活躍します。天照が岩屋の外に出て世が明るくなったとき、天上の神々の顔が白く見えたのを喜んで「あはれ。あな、おもしろ」と言ったともあり、「おもしろ」の語源が神々の顔が白く明るく見えたときの「面白」であることも記されています。

一天祖神社歌占の神々一

天祖神社の神様

あまてらすおおみかみ
天照大御神

日本神話を代表する太陽の神様。『古事記』では、^{よみのくに}黄泉国から帰還した^{いざなぎのみこと}伊邪那岐命が、体を清めるために行った^{みそぎ}禊で左目を洗ったときに生まれた神とされています。弟の^{すさのおのみこと}素戔嗚尊の乱暴な振舞いをおそれて^{あまのいわと}天岩戸の奥に籠もった天照が、天の神々の尽力で再び外に姿をあらわす天岩戸神話が有名です。

その他、素戔嗚尊が天照に会おうとして天上界へ昇ったときに身の潔白を示すため占いを行った^{うけい}誓約神話や、天照が^{おおくにぬしのかみ}大国主神から地上の支配者としての地位譲り受ける^{くに譲り}神話、天照の孫である^{ににぎのみこと}邇邇芸命を地上界に遣わす^{てんそんこうりん}天孫降臨神話など、いくつもの重要な場面で登場し、天上の世界である^{たかまのほら}高天原を支配する神として活躍します。

とようけびめのかみ
豊受氣毘売神

食物をつかさどる神様。「^{うけ}受気」は食物を意味します。伊勢神宮の外宮にまつられており、その社伝『^{とゆけぐうぎしきちよう}止由気宮儀式帳』によれば、^{ゆうりやく}雄略天皇が、丹波国から食物をつかさどる神である^{みけつかみ}御饌都神として、豊受氣毘売神を伊勢に呼び寄せたとあります。^{あまてらすおおみかみ}天照大御神にささげる食事をつかさどることから、衣食住に関わる産業の神としても信仰されています。

おおやまくいのかみ
大山咋神

山を支配する神様。神名「オオヤマクイ」の「^{くい}咋」は「杭」を指し、大山に杭を打つ神、すなわち大きな山の所有者を意味します。『古事記』には、近江国（現在の滋賀県）の^{なりかぶらのかみ}比叡山の神として鎮座し、京都松尾（現在の松尾大社）の^{なりかぶらのかみ}鳴鏑神であるとも書かれています。『古事記』には、赤く塗った矢に姿を変えた松尾大神と結ばれた^{たまよりびめ}玉依姫が御子神を産んだという^{にぬりや}丹塗矢神話も収められています。大山咋神は江戸時代には徳川家の氏神として信仰されました。酒造技術を持った渡来人の^{はた}秦氏が大山咋神を信仰したことにより、酒造の神ともされました。本殿の他、境内の末社「^{まつしや}日枝神社」にもまつられています。

御末社の神様

おおひるめのむら
・大日靈貴

太陽の女神。天照大御神の古名です。「^め靈」は「尊い女」を意味することから、大日靈貴は日の女神とされます。

この神の誕生については、『日本書紀』巻一・神代に、二通りの伝承が記されています。一つは、イザナギとイザナミが天下を治めるべき神として日の神を生んだというものです。大日靈貴が非常に明るく美しく天地四方を照らしたため、天下ではなく、天上を治めることになったと伝えられています。もう一つは、イザナギが天下を統治する尊い子を生もうとして、白銅鏡を左手に持ったときに誕生したというものです。境内の末社「伊勢神社」にまつられています。

つぐよみのみこと
月読命

夜の世界をおさめる神様。『古事記』では、^{いざなぎのみこと}伊邪那岐命が身を清める際、右目を洗うときに出現した神とされ、伊邪那岐命に「^{よるのおすくに}夜之食国」の支配を命じられました。

神名「ツクヨミ」は、月が満ち欠けする日を数えることを意味し、暦と関係があります。『日本書紀』¹⁴では、月読命は青々とした広い海の潮が重なるところを治めると書かれるように、月の満ち欠けと潮の満ち引きは深く関わっています。

『万葉集』では「ツクヨミ（月夜見）」が若返りの霊水「^{をち}をち水」を持つものとして歌に詠まれています。

境内の末社「^{まつしや}月読神社」にまつられています。

てんじん
天神さま

学問の神様。平安時代に政治家・詩人として活躍した^{すがわらのみちざね}菅原道真が^{しんかくか}神格化され信仰されています。道真は学者一族の出身で右大臣の位に上りましたが、政敵^{ふじわらのときひら}藤原時平の^{ざんげん}讒言により太宰府に左遷され、その地で亡くなりました。道真の霊を慰めるため、^{てんりやく}天曆元年(947)に北野天満宮が創祀され、

しょうりやく しょういち いだじょうだいじん いれい
正 暦 四年(993)には正一位太政大臣の位を贈って慰霊し、
てんまてんじん
天満天神としてまつられました。

平安時代末期になると学問の神、文章・詩歌の神として崇
拝され、鎌倉時代には和歌の神、冤罪を晴らす神、正直を守
る神としての信仰も始まりました。室町時代以降は連歌や文
字上達の神としても信仰されました。

境内の末社「北野神社」にまつられています。

ほむすびのかみ 火産霊神

火の神様。かぐつち かぐつち
迦具土神・軻遇突智とも呼ばれています。『古
事記』には、伊邪那美命が火の神を生んだとき、その炎で
いざなみのみこと
火傷を負って亡くなってしまい、それに怒った伊邪那岐命
いざなぎのみこと
が剣で火の神を斬ったと記されています。そのとき火の神の
き
体から飛び散った血が、岩や地面や剣などに付着し、そこか
ら水・山・剣・雷の神など、たくさんの神が生まれました。
火の神をまつことで火災が起きなくなると信じられ、火難
の神としてもまつられています。

伊邪那美命が火産霊神を産んだ後に埴山姫を産んだことか
ら、この二神は結婚しているという伝承があり、ペアで取り
上げられることもあります。境内の末社「榛名神社」でも二
神が一緒にまつられています。

はにやまひめのかみ 埴山比売神

土の神様。肥沃な田畑の土、陶器をつくる粘土などをつか
さどるため、農業、陶磁器製造業、造園業、土木関係の職業
などの守り神として信仰されています。

『古事記』には、イザナミが火の神を生んで病みふせた際
に生まれたと書かれ、『日本書紀』には、火の神と夫婦とな
ったと伝えられています。火の神の後に生まれたという神話
から、土による鎮火法と関連づけられ、火の神のパワーを鎮
ちんかほう
める神としても信仰されています。境内の末社「榛名神社」
まっしや はるな
では二神が一緒にまつられています。

うかのみたまのかみ 宇迦之御魂神

稲をつかさどる神。「宇迦」は食べ物の中で日本人の主食
である稲を意味します。農業や商売の神様ともされ、京都の伏
見稲荷をはじめ、全国の稲荷社で「お稲荷さま」として広く信
いなり

仰されています。白いキツネはお稲荷さまのお使いです。境内
の末社「稲荷神社」にまつられています。

あまのいわとびらき 「天岩戸開」絵馬に描かれた神様

あまてらすおおみかみ 天照大御神

→「天祖神社の御祭神」の項に掲載。

あめのうずめのみこと 天宇受売命

芸能をつかさどり、リーダーシップを持つ女神。芸能、技芸
全般の神として信仰されています。天岩戸神話において、岩
屋に隠れた天照大御神を招きだすため、神がかって滑稽な踊
りをして神々を大いに笑わせました。

天孫降臨神話においては、地上に降りる邇邇芸命のお供を
てんそんこうりん ににぎのみこと
し、邇邇芸命の命令で、天と地の分かれ道にいた猿田彦神に
さるとひこのかみ
声をかけ、その名前をたずねました。これによって、天宇受売
命は猿田彦神の「猿」の名前にちなんで「猿女君」と言われる
ようになりました。

あめのこやねのみこと 天兒屋命

神様に捧げる祝詞をつかさどる神様。天照大御神が天
のりと あまてらすおおみかみ あまの
岩屋に籠ったとき、天兒屋命は天照大御神に出て来てもらうた
いわけや
めに尊い祝詞を唱えて祈りを捧げました。天兒屋命が手に持っ
ている縄は神聖な注連縄です。天照大御神が天岩戸から出て来
しめなわ
た時に、『古事記』では太玉命が、『日本書紀』では天兒屋
ふとたまのみこと
命と太玉命の二柱が天岩屋と天照大御神の間にこの縄を引き
渡して、天照大御神が再び天岩屋にもどらないようにしました。
『古語拾遺』では、この縄は日御綱とも呼ばれ、天照大御神が
ひのみつな
新殿に遷った時に、天兒屋命と太玉命の二柱がその周囲に引
にいみや うつ
き巡らせて、新殿が聖域であることを示しています。

あめのたちからおのかみ 天手力雄神

力自慢の神様。天岩戸神話では、天手力雄神が岩屋のそば
あまのいわと
で待機し、天照大御神が顔を出した瞬間を見計らって戸を開
あまてらすおおみかみ
け、その腕を引っ張り外に連れ出しました。このことから、腕
力やスポーツの神様として信仰されています。

『古事記』の天孫降臨神話では、思兼神おもいかねのかみや天石門別神あまのいわとわけのかみとともに邇邇芸命ににぎのみことにお仕えしました。その後、伊勢の佐奈（現在の三重県）に鎮座したとされます。

おもいかねのかみ 思兼神

知恵をつかさどる神様。名前の「思」は思慮、「兼」は兼ね備えるの意で、「たくさんの人々の持つ思慮を兼ね備える神」を意味します。天照大御神あまてらすおおみかみが天岩屋あまのいわやに籠って世界が暗闇になった時、思兼神は、天上の神々が協力することで天照大御神を岩屋の外に出す方法を考え出しました。

地上の世界である葦原中国あしはらのなかつくにを平定する際には、思兼神が地上に派遣する神の選定を行いました。邇邇芸命ににぎのみことが地上に降り立つ天孫降臨神話では、それにお供する神として登場しています。

さるたひこのかみ 猿田彦神

天孫降臨神話において先導役をつとめた神様。猿田彦神は天から降りようとする邇邇芸命ににぎのみことを天と地の分岐点で出迎えて地上まで案内しました。『日本書紀』によれば猿田彦神は天地の間で上下を照らし出しており、身長は2メートル以上、長くのびた鼻、明るくきらきらした口角、赤く光り輝く鏡のような目をしていたそうです。天孫降臨のさいに猿田彦神の名をはじめてたずねた天宇受売命あめのうずめのみことが、後に猿田彦神を伊勢狭長田さなだの五十鈴川いすずがわの上流へ送ったとも書かれています。

ながなきどり 長鳴鳥

名前の通り、声を長くひいて鳴く鶏。その声には朝を告げ、邪気を払う力があります。『古事記』『日本書紀』の天岩戸神話では、岩戸の前で鳴き、夜明けを知らせる役割を担いました。「常世の長鳴鳥」ともいわれ、常世に住む鳥とされています。常世とは海のかなたにあると考えられた不老不死の国です。

ふとたまのみこと 太玉命

占いと祭祀をつかさどる神様。天照大御神あまてらすおおみかみが天岩屋あまのいわやに籠って世界が暗闇になったとき、太玉命は、他の神様たちが造った様々な道具を榊の木に取り掛け、御幣として捧げ持って、天照大御神が再び現れてこの世に光が戻るように心から祈りました。

『古語拾遺』では、天日鷲命あめのひわしのみこと、手置帆負命たおきほおひのみこと、彦狭知命ひこさしりのみこと、櫛明玉命くしあかるたまのみこと、天目一箇命あめのまひとつのみことという五柱の神様を率いており、天岩戸神話では、他の多くの神様のリーダーとして活躍したと書かれています。

やたのかがみ 八咫鏡

天岩戸神話において天照大御神あまてらすおおみかみをこの世に戻すために重要な役割を果たした鏡。天照大御神が天岩戸に籠もられたとき、太玉命ふとたまのみことは八咫鏡を取り掛けた榊を捧げ持って一心に祈りました。この八咫鏡は後に伊勢の大神の御神体になったとも伝えられています。鏡は全てのことを正しく映し出すものであり、鏡のごとく平らかに、明らかに国を治める象徴として信仰されました。

八咫鏡とは「大きな鏡」の意味で、「八」は日本の聖なる数で多数を表し、「咫」は親指と中指を開いた長さと言われます。

ほうけいいなり 豊敬稻荷神社の神様

おおみやのめのかみ ・大宮売神

コミュニケーションの女神。うるわしい言葉で神々や人々の仲を調整し、平穏無事を保つ神様です。

『古語拾遺』によれば、大宮売神は古いと祭祀の神である太玉命の神秘的な力によって生み出されたといえます。天岩屋から出てきた天照大御神が新築の神殿に移ると、大宮売神はそば近くに仕え、宮中の女官のように神々を取り成し、天照大御神を喜ばせたそうです。

平安時代の法制書『延喜式』には、宮中の平安を祈る大殿祭の祝詞には、大宮売神は天照大御神の子孫の御殿に出入りする人を選び、人々に問題が起こらないよう言葉を尽くして気を配り、その場を平安にすると記されています。

天皇を守る八神の一柱として八神殿にまつられているため、家や組織の守護神としても信仰されています。酒を醸造する造酒司の神でもあります。

天祖神社の境外にある末社 豊敬稻荷神社（板橋区弥生町）にまつられています。

御嶽神社の神様

やまとたけるのみこと

倭建命

武勇に優れた神様。景行天皇の第二皇子で、国の平定のために日本各地で数々の功績をあげた伝説的英雄です。

『古事記』には、倭建命が相模国で国造にだまされて草原の中で火をつけられた際、神剣で周囲の草を薙ぎ払って難を逃れたと書かれています。この剣は三種の神器の一つである草薙の剣であり、倭建命が叔母の倭比売命から授かったものです。

倭建命は戦いに強く、困難を切り抜ける力を持つことにより、武運長久、難局打開の御利益があるとされています。御嶽神社（板橋区桜川）で御祭神としてまつられています。

おいぬさま

導き・厄除け・疫病除けの神様。かつて日本に生息していたニホンオオカミは山犬とも呼ばれ、人々の生活の中で山の神の使いとして信仰されてきました。『日本書紀』では、信濃の深い山で道に迷った倭建命の前に一匹の白い犬が現れ、出口まで導いたとされています。

御嶽神社（板橋区桜川）には江戸末期の嘉永7（1854）年に造られた阿吽形の狛犬像が鎮座しています。近年では愛犬の守り神としても信仰されています。

○解説執筆（五十音順）

渥美真紀・牛田きぬ・加瀬あゆみ・小林脩人・杉田将一・石田創太郎・杉本亜由美・陳倪・董航・何雨峰・任航・平野多恵・福嶋真由・藤崎文音・本田逸朗・李輝・張鵬程